



ミンガラバー

こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

医療機器人材を育成 5年間に約100人

活動の重点項目実現

ミャンマーで初めて医療機器管理人材(メデイカルエンジニア)を育成するプロジェクトが日本側の支援でスタートした。年間約20人ずつ、5年間で約100人を育てる。このプロジェクトには計画段階から協会の岡田茂理事長と木股敬裕理事(岡山大学教授)が深く関わった。

事業費は約5億5千万円で、政府開発援助の実施機関のJICA(国際協力機構)が負担。現地での教育は日本臨床工学技士会と臨床工学国際推進財団が講師を派遣して、ヤンゴン医療技術大学で実施する。プロジェクト全体の調整役を岡山大が担い、このため学内にミャンマー医療協力部が設けられた。現地ではコン

サルト会社T.Aが講義の連絡調整にあたり、ミャンマーの医療現場では、大病院であっても医療機器の保守・点検・管理の専門職がおらず、故障機器は放置されており、患者サービスに支障をきたす場面が多い。また、新しい医療機器が導入されても操作や保守管理などにあたる技術者がいないため、日本の

臨床工学技士のような高度の医療機器を扱うことができる人材の育成が急務となっていた。

このため協会では育成を活動の重点項目にかかげ、

この提案を受けて日本ミャンマー協会の仙谷由人副会長(内閣官房長官)が医療機器人材育成研究会を発足させ、検討を進めてきたのが実現した。



開講式の後、手前の1期生と話し合う岡田理事長(正面左端)と木股理事(その右)=ヤンゴン医療技術大学

「画期的なプロジェクト」 ミャンマー保健相挨拶

6月1日、ヤンゴン医療技術大学で開講式があった。協会の岡田理事長、木股理事をはじめ日本ミャンマー協会の渡邊秀史会長(元郵政相)、日本臨床工学技士会の本間崇理理事長、臨床工学国際推進財団の川崎忠行理事長、駐ミャンマー日本大使館の田中幸参事官、JICAミャンマー代表の挨拶があった。

6月1日、ヤンゴン医療技術大学で開講式があった。協会の岡田理事長、木股理事をはじめ日本ミャンマー協会の渡邊秀史会長(元郵政相)、日本臨床工学技士会の本間崇理理事長、臨床工学国際推進財団の川崎忠行理事長、駐ミャンマー日本大使館の田中幸参事官、JICAミャンマー代表の挨拶があった。

第1期生は18人。検査技師や看護師などの医療経験者と工学部出身者が半数ずつで、1年間勉強する。

貧困地域の教育支援を

総会 今年度事業承認

向こう1年間の活動内容などを決める協会の総会が7月28日夕、岡山市中区浜の岡山プラザホテルであった。会員約50人が出席、約250人から議決一任の委任状が寄せられた。

総会では2017年度(17年7月―18年6月)の事業報告と会計報告、18年度(18年7月―19年6月)の事業計画と会計予算が承認された。18年度予算は一般会計と特別会計を合わせて約2千500万円。この

うち1千350万円を事業にあて、予備費として計上の約750万円は予定外の支出が無い限り、19年度予算へ繰り越す。

18年度の事業は基本的にはこれまで取り組んできた支援活動を継続する。そんな中で変わるの、活動の大きな柱だったミャンマーの貧困地区へのクリニック寄贈は、応の成果をあげたと判断。代わって、貧困地域の教育施設の向上を図る事業を展開することに、小学校の寄贈などを会員に呼びかける。

協会の呼びかけに応じて会員らが贈ったクリニックは計17か所。無医村であったり、診療所があってもサイクロンで壊れたままのところまで来た寄付クリニックは、どこも地域医療の中心になっている。

総会の後は恒例の懇親会。総会出席者のほとんどが参加し、また岡山大学大学院に留学しているミャンマーの学生13人も加わって、親睦を深めた。

留学生はこの日の昼間、永山久夫理事の計らいで、岡山市内で公演中の木下大サーカスに招待され、初めて見るサーカスの演技に大喜びだった。

2018年度予算

費目	予算額		説明
	一般会計	特別会計	
繰越金	4,765,724	5,113,503	前年度より繰越
会費・入会金	1,850,000	0	会費170人、入会金10人 賛助会費10人 役員運営協力金20人
寄付金	5,000,000	5,000,000	一般寄付金、運営協力費
助成金	3,000,000	0	永山積善会、渋谷育英会、その他
雑収入	200,000	0	預金利子、協賛金等
合計	14,815,724	10,113,503	

【支出の部】

費目	予算額		説明
	一般会計	特別会計	
事業費	7,500,000	6,000,000	一般会計 ミャンマー医療人の研修・研究支援に関する事業5,000,000 公的機関と協力して支援する事業200,000 ミャンマーにおける医療実践を支援する事業1,500,000 組織活動の公表に関する事業800,000 特別会計 あかね基金活動費4,000,000、MAJA-岡山、クリニック寄付2,000,000
会議費	700,000	0	総会懇親会・役員会等
旅費	1,000,000	0	出張旅費
光熱水費	200,000	0	電気、ガス、水道代等
通信運搬費	400,000	0	電話代・インターネット使用料等
消耗品費	300,000	0	事務用品
印刷費	30,000	0	総会資料印刷代
諸謝費	50,000	0	講演等謝礼
負担金支出	5,000	0	岡山県国際団体協議会等負担金
支払手数料	30,000	0	郵便振替手数料等
委託料	450,000	0	会計事務委託、決算書作成委託料
賃貸契約料	750,000	0	賃貸契約に基づく固定資産税
予備費	3,400,724	4,113,503	
合計	14,815,724	10,113,503	

山陽新聞 社会長
越宗 孝昌

なぜ死なねばならなかったのか

この夏、ミャンマーを初めて訪れました。

岡山医科大学(現・岡山大学医学部)を卒業し大阪の病院に勤務していた父は、先の大戦中の昭和18年3月に召集され、軍医としてビルマ、現在のミャンマーに赴きました。日本軍は、その1年前に当時の首都ラングーン(現・ヤンゴン)を陥落させ、ビルマ全域を制圧していました。

しかし、父がビルマ戦線に加わった年の後半、英国軍を中心とする連合国軍の本格的な反攻が始まりました。戦局は悪化の一途を辿り、退却戦となったビルマ戦線は生き残る方が難しい過酷な状況でした。そんな中、父は戦死。戦後、岡山県護国神社で受け取った白木の箱の中には何も入っていませんでした。

父の出征後、赤磐郡鳥取上村(現・赤磐市西窪田)にあった母の実家に引き取られた私は、実家の家業を手伝う母のもとで成長。大学卒業後、山陽新聞社に入社し、事件や事故の現場に駆けつける社会部の記者を長くしました。父のことは、いつも心のどこかにありました。ただ、敢えて、そのことを炙り出すことをしなかった自分があったのかもしれない。

目の前のことに一生懸命に生きていたら、いつしか昭和が終わる、平成も最後の夏を

迎えていました。父が息絶えた地を訪れることは思いもつきませんでした。山陽放送がテレビ放送開始60年を記念し、「終戦の日」に合わせ制作する特別番組の取材のため、ミャンマー行きのかかったのです。

終戦2日前、享年35歳

終戦前の1カ月間、父の所属する第五十四師団を含む第二十八軍は闇にまぎれてシタン川を渡ってビルマ南部に撤退する「シタン作戦」の最中でした。雨季に入ると川幅は200メートルに達し、速い流れの中を竹で急ごしらえした筏に装具を載せて数人で泳ぐ渡河作戦。日本兵約3万4千人のうち2万人近くが川に流されたり、銃撃により命を落したりしました。



慰霊式の後、僧侶と記念撮影

渡河作戦の川を今回は2艘の木船をつないだフェリーで渡ったシタン川



所で機銃掃射を受けて負傷。破傷風に侵されながらも集結地を目指していましたが病状が悪化し、8月13日に息絶えたと伝え聞いています。享年35歳。終戦2日前のことでした。

激動の国際情勢、不安

兵士一人一人は、故国に残してきた妻子や親兄弟のことを思いながら最後まで勇敢に戦い、国に忠誠を尽くしました。ビルマ方面作戦に参加した日本軍将兵30万余の戦没者は6割を超え、18万5千人に達したとされます。なぜ、はるばる離れた彼の地まで来て戦わねばならなかったのでしょうか。国家が一人一人の国民に、このような多大な犠牲を強いる必然性はどこにあったのか。ヤンゴンの日本人墓地で、岡山県ビルマ会などが建立した慰霊碑に手を合わせながら、そのことを思い出しました。

ミャンマーから戻り、以前と変わらぬ慌ただしい毎日を過ごしながらも、胸の内にあるビルマの風景、そして亡き父への思いは以前とは違ったものになりました。そのことは、確かであるように感じています。慰霊のために巡った各地の光景をふと思い浮かべ、そこに感じた空気に思いを遣ると、何だか、夢の中の出来事だったような気分になり、そして何故か、遠い昔の出来事だったようにも感じているのが不思議です。

今、目まぐるしく変わる激動の国際情勢を見ています。戦後のわれわれが当たり前のように享受してきた平穏な暮らしが突如、崩れる日がくるのではないかと、不安な気持ちもたげられます。私がこの世に生を受けたのは、太平洋戦争の開戦間もない昭和16年末でした。父がビルマの戦場から2歳の私宛に送ってくれた葉書にあった言いつけを守ってきたのかどうか：気づけば、父の倍もの年齢になっていました。母が95歳を超えて元気でいてくれるうちに、父が命を落としたビルマの地を訪れることができて本当に有難かったと思っております。

山陽放送の終戦特番「ゲンキカ、タカマサヨ」は8月12日に放映されました。日本・ミャンマー医療人育成支援協会の岡田茂理事長、山陽放送の喜多泰功記者をはじめ事前調査や現地同行などでお力添えいただいた皆様にご心より感謝を申し上げます。

協会だより

薬品30万円分贈る

大洪水被災地へ

ミャンマー中南部で7月、10万人以上が被災する大洪水が発生。協会は救急薬品30万円分を国民健康財団を通じて被災地へ贈った。

10万円を寄託

岡山豪雨義援金

7月の西日本豪雨で大きな被害が出た岡山県内への

前原さん就任

監事2人制に

協会は監事2人制にすることにし、7月の総会です承された。

今の監事武田和久さん(岡山大学名誉教授)に加えて、事務局長の前原幸夫さん(税理士法人久遠代表)が新監事に就任。事務局は久遠の小林規彦さんが担当する。

ヤンゴンの 岡山大医学部で学ぶ 医学生10人



調べたことを発表するミャンマーの学生たち 岡山大学医学部

ヤンゴン第一医科大学と同第二医科大学の3年生10人が4月、岡山大学医学部3年生の授業に参加。3週間わたって、病気の原因について基礎的なことを学ぶ「基礎病態演習」の授業を受け、学んだことを討論したり発表し合った。

岡山大とミャンマーとの学生交流事業で今年3年目。協会と岡山県医師会が旅費と生活費を支援した。

寄稿

亡き父の「敗走の道」を辿る

8月は祈りの月です。広島へ原爆投下の6日、長崎への9日、そして終戦の日の15日、私も毎年黙祷します。祈りながら、いつも思うことがあります▼戦局は悪化、勝機が全く見えない中、日本はなぜ抗戦し続けたのか。もっと早く、せめて半月前に降伏していたら広島、長崎の悲劇はなかったのに…▼越宗孝昌さんの父の戦死は終戦の2日前でした。「ミャンマー慰霊の旅」、しみじみと読ませていただきました。(西崎)